

東京都
教育委員会
都立高校

都立高校の新教科「人間と社会」のなかで 主体的にチーム活動に取り組む意義と方法を考える

家庭科での実践効果から 新教科の一単元に



駒場高校
木村裕美先生



東京都教育庁指導部
高等学校教育指導課
統括指導主事
小林正人先生

東京都は人間としての在り方生き方に関する新教科「人間と社会」を開発し、今年度より全ての都立高校に必修教科として導入した。「グローバル化や少子高齢化が進むこれからの社会で必要な力を養う重要な教科」と、東京都教育庁の小林正人統括指導主事。そんな同教科に、リーダーシップ教育をテーマにした単元が組み込まれている。

リーダーシップ教育を含めるきっかけとなったのは、同教科教科書執筆担当委員を務めた駒場高校の木村裕美先生からの提案だった。木村先生は4年前、立教大学経営学部でのBLPの授業を見学する機会を得た(参考P18)。学生の姿からその教育効果の高さを実感し、自身の家庭科の授業にリーダーシップの考え方を取り入れ始めたという。「家庭科では、主体的に家庭や地域の生活を創造する能力を育てることを目指しています。主体性を発揮することを生徒に伝わるように説明するのは難しいのですが、実験や実習などの行

動目標に「チームの目標を達成するために自分のできることで貢献する」という考え方をを用いると、生徒は理解しやすいようです。例えば、調理実習で皿洗いなどの後片付けをすることも班の目標達成に向けた活動のひとつと考えれば、前向きにとらえて主体的に取り組めるようになります。実際に後片付け

を熱心に行っている生徒にそのような言葉がけを行ったところ、「自分のやっていることに自信をもつことができたので、次の実習も頑張りたい」と感想欄に書いてありました(木村先生)。

こうした授業実践の経験が「人間と社会」への提案につながった。「中教審の諮問でもリーダーシップの重要性に言及していることから、都として推進していく必要があると判断しました」と小林統括指導主事。教科書のコンテンツ18単元のうちの1つとなった(図1)。

「チーム活動で必要なことは?」事例を基に考え話し合う

リーダーシップ教育を扱う単元は「8章・チームで活動することの意義」。「チームで協働すること」を前面に出し、そ

こで必要となる各自のリーダーシップについて考えさせる。学習の目的は、「他者と協力して活動することを通して、より良い人間関係を築くことについて考える」「一人ひとりがリーダーシップを発揮して、主体的に行動できる力を育てる」の2つだ。

「社会の変化の激しいこれからの時代では、他者と協力して問題を解決する場面がますます増えていくと考えられます。誰もがリーダーシップを発揮することが求められるようになっていくなか、どのようにリーダーシップを発揮したらよいか、また、その力をどのように養っていけばよいかを学習します(木村先生)。

当該単元で生徒に問うのは、「チームで活動するときには、どのような力が必要か」。授業では、教科書に書かれた「文化祭係としてクラスをまとめるうえで葛藤する高校生のエピソード」や「会社のプロジェクトチームで問題が発生したケース」といった具体的な場面に ついて、そのときにどう行動したらよいか、それはなぜかを考えていく。個人で考えるだけでなく、グループでお互いの考え方を共有・発表することで、判断

図1 「人間と社会」のコンテンツ

章	テーマ	
序章	学習の視点を考える	9 人生とワーク・ライフ・バランス
1	人間関係を築く	10 お金の意義について考える
2	学ぶことの意義	11 支え合う社会
3	働くことの意義	12 地域社会を築く
4	役割と責任を考える	13 自然と人間の関わり
5	マナーと社会のルールについて考える	14 科学技術の先に…生命倫理を考える
6	ネット時代	15 文化の多様性
7	選択し、行動する	16 グローバル化が進展する社会に生きる
8	チームで活動することの意義	17 対立から国際平和を考える
		18 主権者としての自覚
		最終章 これからの生き方を考える

リーダーシップ教育
含む



東京都教育委員会著作物、人間としての在り方生き方に関する教科「人間と社会」の教科書。

取材・文／藤崎雅子

教科「人間と社会」とは？

東京都が開発し、全都立高校で実践する「人間としての在り方生き方」をテーマとする教科

■ 道徳とキャリア教育を一体化

東京都が開発した教科「人間と社会」の目標は、「道徳性を養い、判断基準（価値観）を高めることで、社会的現実にも照らし、よりよい生き方を主体的に選択し行動する力を育成する」。いわば道徳教育とキャリア教育を一体的に学習する教科で、都立高校が9年間取り組んだ学校設定教科「奉仕」の奉仕体験活動の要素も取り入れている。

「人は道徳性に基づく判断基準をもって選択・行動します。多様な価値観に触れることで道徳性を養い、判断基準を高めることで、よりよい生き方を主体的に選択し行動する力を育成するのが、新教科のねらいです」(小林統括指導主事)

人間としての在り方生き方に関する諸要素の関係



■ 演習と体験活動が中心

都立高校教員10人を含む作業部会を編成し、オリジナル教科書も作成した。授業では、この教科書を使った「演習」(全18章から4章以上選択)と、奉仕体験活動やインターンシップなどの「体験活動」を行う。

学習全体に通底するのは、「これから何を大切に、どのように生き、そしてどのようにして幸せな世の中にしますか」という問い。この視点に基づき、人間関係や文化の多様性などの各単元を学習する。いずれの単元も国語や公民、情報、特別活動など様々な教科と関連した内容であり、「人間と社会」によって築いた道徳性や判断基準を各教科が引き継いで深めていくことが想定されている。

新教科「人間と社会」の基礎情報

- 授業時間数
週当たり1単位時間の実施 年間35単位時間(1単位)以上
- 授業の構成
 - 「演習」による学習 16単位時間 使用教科書の4テーマ以上アクティブラーニング形式を活用
 - 「体験活動」による学習 19単位時間
- 評価
数値評価ではなく文章記述による評価

ほかの教科や活動と連動し学習効果を高めていく

基準を高め、選択・行動する力に反映。未来をどう生き、どう世の中に貢献していくかという命題につなげる(図2)。

しかし、実際のところ「人間と社会」の学習時間の学習だけでリーダーシップを発揮する力を身に付けさせることは難しい。木村先生が昨年度家庭科の授業のなかで1年間を通して、リーダーシップ教育の視点を取り入れて授業実践を行った際も、秋ごろになってようやく共通キーワードとして「リーダーシップ」

という言葉が生徒から出るようになってきたという。「人間と社会」として学ぶ際も、「リーダーシップ」の視点を他教科や特別活動、部活動などの学校生活のあらゆる場面と関連付けて、「どのようリーダーシップを発揮していく？」と問い続けることが重要であるようだ。「生徒が主体性を発揮できるようにすることを意識して指導されている先生が多いと思います。『人間と社会』で考え方の土台ができれば、他の教科等にも広げていきやすいのではないのでしょうか」(木村先生)

木村先生はリーダーシップについて学ぶうちに、自身の仕事や生活に対する姿勢に変化が生じたという。「私自身、仕事で悩んだり、仕事と子育ての両立が難しかったりと、自分の生き方はこれで良いのだろうか？と常に迷いがあります。そんななかでも、リーダーシップの考え方を生かし、自分ができることから行動するうちに、自分が想像もしていなかった未来が開かれて、迷いながらも進んでいくことの価値を実感しました。自らの人生を自分自身が納得するものにできるリーダーシップの考え方を、ぜひ生徒たちに伝えていきたいと考えています」(木村先生)

図2 各単元の授業展開

